



ベストティーチャーに聴く 授業の工夫①

鹿児島大学 FD 委員会 FD ガイド WG

【発行/2019年9月】

◆ 「鹿児島大学ベストティーチャー賞」とは?

「鹿児島大学ベストティーチャー賞」は、平成30年度より開始された新たな取り組みです。その主たる目的は、鹿児島大学(以下、「本学」とする)で行われる教育活動において顕著な成果をあげた教員を表彰し、本学に在籍する教員の意欲向上とさらなる教育の質的向上を図ることにあります。

この賞は、本学が開設する授業を担当する教員の中から2段階で選出されるものです。まず、各学部及び共通教育センターから各1名が選出されます。その指標として用いられるのは、授業運営に関する工夫や高い指導力による教育の成果等です。次に、各学部及び共通教育センターから選出された10名の中から、学長や教育担当理事・副学長をはじめとする選考委員会により、ベストティーチャー最優秀賞として最大3名が選出されます。

今年度のFDガイドでは、本学最初のベストティーチャー最優秀賞受賞者である3名の先生方の授業運営に関する工夫や注意点等を紹介することとしました。それぞれ専門分野だけでなく、担当授業の位置づけも共通教育、専門教育と異なり、対象となる受講生の学年も様々です。しかし、そうした違いを超え、共通して取り入れることができ、効果を発揮するコツもあるのではないのでしょうか。実りある授業のあり方を共有することにより、本学の教育における一層の質的向上につながることを期待しています。

◆ 平成30年度「鹿児島大学ベストティーチャー最優秀賞」受賞者の声①

- ▼ ^{ちよん} 鄭 ^{じすく} 芝淑 (共通教育センター)
- ▼ 担当科目: 初級韓国語Ⅰ・Ⅱ(1年次)等

1 コミュニケーション活動の重視

外国語学習の目標は知識の習得ではなく、コミュニケーション能力の養成であるという前提に立って、できる限り、学生と教師の、あるいは学生間の対話活動を通じて授業が進行するように図っています。学習内容の正確な理解が重要で

あることは言うまでもありませんが、そこに留まらずに、習ったことをコミュニケーション行動として使えるように練習しています。

2 人間関係の重視

円滑なコミュニケーションを可能にするためには信頼関係を築かなければなりません。そのため有効な方法として、できるだけ早く、個人名で呼びかけるように努めています。30名までの規模のクラスであれば1回の授業で、5、60名規模のクラスでも3回目の授業までには学生の名前をすべて覚え、授業中ばかりでなく教室外でも個人名で呼びかけることにしています。これは、学生と教員の距離を縮めるのに予想をはるかに超えた効果があるようです。学生同士も、単に同じ授業を受けているだけの関係ではなく、互いに名前を呼び合える関係になるように図っています。授業中の活動は学生がペアを組んで行うのを基本にしていますが、毎回異なる人とペアになるように工夫をしています。ペアワーク

で行うことは、朗読練習、翻訳練習、対話練習、小テストの自己採点等ですが、もう一つ重要な役割があります。それは、わからないところがあれば学生同士で教え合うということです。特に、前回の授業に欠席した学生には、ペアを組む学生が手助けするようになっています。ペアワークの効果も絶大で、授業を初めて一、二か月すれば学生同士の関係が非常に密になり、クラスの一体感が生まれて活気が出てきます。



11号

12号

13号

14号

15号

16号

17号

18号

19号

20号



ベストティーチャーに聴く授業の工夫①

3 楽しい学習

「外国語の学習は楽しく進めなければならない」と考えて、いろいろな工夫をしています。外国語の学習には地味な練習を根気よく反復する過程が必要ですが、授業でこれを機械的にやるとどうしても単調になりやすく、学習意欲の低下を招くことになりかねません。それを避けるために、適宜、ゲーム形式の練習を取り入れるようにしています。しかし、そのような方策が最も重要なことではないと考えています。学習・練習を通じて、これまで

知らなかったことが理解できるようになり、できなかったことができるようになるという自分の成長を確認することが、外国語学習の楽しみであることを理解してもらっています。「楽しい」と「楽だ」は全く別物で、「楽でない」努力の先に「楽しみ」があることを学生に実感してもらい、そのような学生の成長を教師としての私が喜んでいてることを感じてもらえるように授業に臨んでいます。

4 統一授業

共通教育科目の「初級韓国語」では平成29年度より統一授業を実施しています。週2回の授業で、同じ時間帯に4クラスが開講され、専任教員1名と非常勤講師3名が担当しています。統一授業の目標は授業の均質化、学習機会の均等化を図ることにありますが、到達目標の統一、学習過程の統一、成績評価の統一の3点に集約できます。具体的には、同じテキストや副教材(提出課題等)を使って、同じシラバスに基づいて授業を行います。今年度からは授業中の小テストだけでなく、期末テストも共通問題とすることで成績評価も統一化することになりました。また、担当クラス以外のクラスを教える機会を設けることも試験的

に行っています。統一授業では、教材の準備等専任教員の負担が増すばかりでなく、非常勤教員にもかなりの時間的・精神的負担を強いることになっていきますが、非常勤の先生方の理解と協力を得て、順調に進められています。肝心の教育上の効果については今後慎重に検討しなければなりません。教員の側ではすでに顕著な効果が生まれています。教員同士の連絡を密にする必要があり、教授法等に関して意見交換の機会が増えて、連帯感が強くなっています。毎週のように実質的に学科FDを実施しているような状況です。これが授業の質的向上につながるのではないかと思います。

5 授業外活動

1学期に10回ずつ、水曜日の12時から13時30分まで実施している韓国語ラウンジは、韓国語や韓国文化に興味を持っている人たちの交流の場です。参加者の8割は韓国語履修者ですが、韓国語の知識がない人の参加も2割程度ありますので、そのような人も楽しめるように多様なメニューを準備しています。平成29年度後期に開設されて以来、回を追って参加者が増え続けて今年度は50名を超えることもあり、会場のキャパシティギリギリの状況になっています。

週1回のラウンジでは物足りない学生が中心になって、平成30年度にはサークルの韓国文化同好会が発足しました。専任教員も顧問として加わっていますが、これは完全に学生主体の集

まりです。

学外で主催されているスピーチコンテストへの参加を奨励したところ、平成29年度から毎回10名近くの希望者があり、その指導にも当たっています。負担は大きいのですが、参加者が韓国語能力を飛躍的に伸ばすことを見ると、やりがいのある重要な仕事であると考えざるを得ません。

オフィスパワーは一応決めてありますが、不都合がない限り随時柔軟に対応することにしています。専任教員が1人だけなので、自分の担当クラスの学生だけでなく、誰にでも質問・相談に応じることにしています。

6 究極の目標

「外国語はやれば誰でもできる。やらなければ誰もできない」というのが語学教員としての私の信念です。誰でもできるはずのことを達成するために、学習者が努力をするのを手助けするのが語学教員の使命だと考えています。ですから、私の究極の目標は一人の落伍者も出さない授業をすることです。残念ながら、これまでの教員生活でこの目標を達成したことは一

度もありません。毎学期末に学生の成績評価をしながら、何が足りなくて学習を放棄する学生を出してしまったのかと反省するばかりでした。この先も決して到達できない目標であるかもしれないですが、この目標をあきらめない限り、教員としての私の前進の余地があると考えています。